

〈平成24年度第35回ペスタロッヂ祭特別講演〉  
(平成25年3月14日)

## ペスタロッヂ・ライフマスクの由来と今日的意義

福 田 弘  
筑波大学名誉教授

〈平成22年度第33回ペスタロッヂ祭特別講演〉  
(平成23年3月10日)

## ペスタロッヂ・ライフマスクの由来と今日的意義

福 田 弘

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました福田でございます。筑波大学40周年という記念すべき年の第35回ペスタロッヂ祭で講演させていただけることを光栄に存じております。このような機会をいただくことになりましたのは、ただ今、筑波大学から感謝状を受けられた小西良弘博士のおかげであります。この度、小西博士より筑波大学に御寄贈いただいたペスタロッヂ・ライフマスクは、大変貴重な、極めて希少価値の高いものであります。このマスクは、1967年に、小西良弘博士の御尊父小西美良先生にチューリッヒのペスタロッヂ研究所 (Pestalozzianum) から寄贈されたものであります。

小西美良先生は、明治31年のお生まれで、大正14年に東京高等師範学校の図画手工専修科を卒業なさいました。その後、美術教育の専門家として奈良県女子師範学校 (現奈良女子大学) 教諭、京都師範学校教諭を務められ、戦後は京都学芸大学 (現京都教育大学) 教授、さらに岐阜大学教授を歴任されました。さらに昭和36年に岐阜大学を定年退職された後も、さまざまな大学で教鞭を執られました。

東京高等師範学校在学中の3年間は小学校教師を休職されましたが、通算53年の長きにわたり、教員生活をおくられました。先生は教育理念をまさにペスタロッヂから学び、その精神を生かした教育実践をされました。また、教員養成に当たっても、卒業生がペスタロッヂ精神を身に付けた優れた教師として、つまり人間を本当に大事にできる、そして子どもたちの内面的な力を信頼して教育する教師として、ペスタロ

ッヂ思想に基づく教育実践ができるようになることを目指して指導をなさったということです。

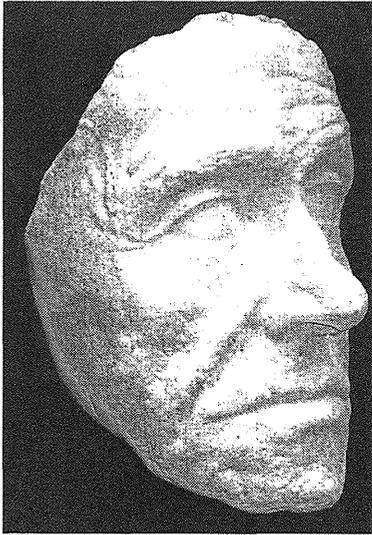
小西美良先生は、学術研究はもとより、芸術作品の制作、例えば造形教育協会とか服装美術教育研究会、あるいは国際デザイン教育研究会をご自身が中心となって創設されるなど、学会活動にも尽力されました。さらに特筆すべきこととして、国際技術教育会議に日本を代表して出席されたことが挙げられます。私はあらためて敬服したのですが、昭和12年にはパリにおける同会議で日本の技術教育に関する研究発表をされ、さらに戦後も昭和41年に、プラハでの国際学会で研究発表をされています。

このようなペスタロッヂ精神に基づく広範な教育活動、ならびにチューリッヒ市と奈良市との国際友好交流事業に関わる特別なご尽力などが高く評価され、先にも触れたとおり、1967年にペスタロッヂ研究所及びチューリッヒ市から、このペスタロッヂのライフマスクが小西美良先生に贈呈されたということでもあります。ペスタロッヂのライフマスクは、私が調べたかぎり、日本には外に存在いたしません。後でも述べますように、全世界的に見ても、ほんのわずかしかな存在しない、貴重なものであります。芸術学系の先生方のお話では芸術的にもすばらしい作品であるということでありまして、そうしたものを筑波大学が受贈したことは、大変に喜ばしいことだと存じております。

私は数十年間、一介のペスタロッヂ研究者としてペスタロッヂに深い関心と敬意をいだけて参りましたが、ペスタロッヂのライフマスクに直に接するのは、今回が初めてです。昨年の10

---

筑波大学名誉教授



筑波大学に寄贈されたライフマスク

月1日午後、塚田先生のお仕事の間であります教育学域代表室でその記念すべき対面をしたのですが、大変大きな感動を受けました。第一に思ったのは、わが敬愛するペスタロッチ先生は、顔がかなり小さめの方だったのだな、ということです。また、鼻が相当に高く、しかも少々曲がっていて、幾筋もある顔の皺が想像以上に深い、ということにもあらためて気づきました。これまでに伝記本等で見た肖像画やチューリッヒ市立美術館等で観た油絵などと比べ、ライフマスクは立体的であるだけに、何ともいえない強烈な印象と感動を受けたのでした。

この初対面を通して、ペスタロッチのオリジナル・ライフマスクは、なぜ、いつ、誰によって制作されたのか、また、複製マスクはどのような経緯で、いつ、いくつ制作され、いまどこに存在するのか、というようなことを調べてみたいという思いがますます強くなってまいりました。幸いなことに筑波大学のお計らいで、昨年11月下旬にヨーロッパでの調査・情報収集を行うことができました。調査旅行の日程は、私自身の仕事の都合で短期間のものとし、現地での調査活動は日曜日を含めて5日間でしたが、思いもよらなかったペスタロッチ研究者との長時間にわたる会談、重要な資料・情報の入手、貴重な展示物の写真撮影など、期待をはるかに

超える成果を上げることができました。

最初の訪問先は、イヴェルドンのペスタロッチ資料・研究センターでした。周知のように、ペスタロッチは1804年から1825年までイヴェルドン城内に私立の学園を設立し、教育研究・実践を行いました。この学園は国際的な名声を博し、多くの国から教育者や教師を引きつけたのでした。このセンターはペスタロッチ没後100年に当たる1977年に設置され、ペスタロッチ学園ゆかりの品々の展示室が設けられています。以前に2、3度訪問したことがありましたが、今回は新たな発見がありました。御寄贈いただいたライフマスクと同じような、しかも色は茶褐色のライフマスクが、展示室の壁に掛けられていたのです。これを見て、私ははっとしました。色違いのライフマスクの存在と、その展示方法の意外性に驚いたのです。そして、この展示方法こそ、ペスタロッチマスクにふさわしいものだと思います。貴重な資料等はガラス張りの箱の中に水平に置き、ガラス越しに上方から見る、というのが一般的だと思います。しかし、ペスタロッチ・マスクはデスマスクならぬライフマスクでありますので、やはり水平に置いて展示するより、壁掛け式で展示の方が自然なのだと納得したのでした。そんなわけで、ここにご覧いただいているような展示方式をご提案申し上げたわけであります。

第二の訪問先は、現在はチューリッヒ教育大学学校史センターに併設されているペスタロッチ研究所 (pestalozzianum) です。1875年に設立されて以来、ペスタロッチ研究支援・情報発信等の重要な働きをしてきた施設ですが、2002年にチューリッヒ教育大学に統合されました。残念ながら現在では、ペスタロッチのオリジナル・ライフマスクをはじめ、ペスタロッチゆかりの物品や絵画等々は倉庫に保存されていて、かつての展示室「ペスタロッチ記念室 (Pestalozzistuebchen)」はありません。ここでは司書のシュテーファン・ケルン氏 (Stefan Kern)、及びチューリッヒ教育大学講師で、「ペスタロッチ宛書簡集」 (Saemtliche Briefe

An Johann Heinrich Pestalozzi. Verlag Neue Zuercher Zeitung) の編者のお一人でもあるレベッカ・ホーラッハー博士のご厚意で、ペスタロッチのライフマスクの複製が作製された経緯等について基本的な情報をいただき、さらに所蔵されているオリジナル・マスクと作製時期が異なる二つの複製マスクに直に触れ、写真を自由に撮影することもできました。

第三の訪問先は、ドイツのフライブルクご在住の、シュトゥットガルト図書館情報大学教授ゲルハルト・クーレマン教授のお宅です。クーレマン教授はアルトゥール・ブリュールマイヤー博士たちと共にインターネットでペスタロッチを「協会 (Pestalozzi im Internet)」を立ち上げた方で、この協会のウェブサイトの運営責任者としても重責を果たしておられる方です。この協会はペスタロッチ関連の貴重な情報や研究成果をインターネット上で公開している国際的な団体です。まったく面識もない私が、ペスタロッチ・ライフマスクの由来や、複製マスクに関する情報等について教えていただけないか、という不躰なメールを送ったにもかかわらず、クーレマン教授は3時間もしないうちに返信をくださいました。しかも、せっかくヨーロッパに来るのだから、是非情報交換もしたいのでできればフライブルクの自宅に来ないか、とお招きくださったのです。

クーレマン教授のご自宅では午後いっぱい、ペスタロッチ・マスクに関するお話だけでなく、ペスタロッチ協会のことやそのウェブサイトのこと等々、じっくりお話しすることができました。とくに複製マスクに関して非常に重要な情報を得ることができました。実はクーレマン教授自身がペスタロッチ・ライフマスクの第一世代の複製マスクを所有しておられるのです。そのマスクの裏側には金属の小さなプレートが着けられていて、そこには Nr.2 と書かれています。つまり、このマスクは、後でお話ししますが、ペスタロッチ没後100年に当たる1927年に初めて数量限定で複製された記念すべきライフマスクの一つなのです。ちなみに、

このマスクはややくすんだ白色でした。

なお、クーレマン教授からは、アルトゥール・ブリュールマイヤー博士がペスタロッチ・ライフマスク及びそれを基にして制作されたペスタロッチの胸像について研究を重ねてきておられるとの情報もいただきました。スイスやドイツで入手した情報・資料と筑波大学図書館所蔵の文献等を使って準備を進めたのですが、やはりどうしても知りたい情報が十分とはいえませんでした。そこで、今年の2月半ばになって、思い切ってブリュールマイヤー博士にメールを書き、事情をお話しして援助を求めました。すると、なんとその2時間後には、思いもよらない内容の返信が届きました。

その中には、博士が何十年もかけて進めてこられた、ペスタロッチ・ライフマスクや胸像等に関する研究成果をまとめた書物をまもなく出版することにしており、その最終原稿は10日以内に完成する予定であること、ただし出版は2013年末頃になるだろうということ、そしてもし緊急に必要なのであれば、出版社に渡す写真等のレイアウト済みの最終原稿をpdfファイルにして送ってあげることもできる、と書かれていたのです。

まるで夢のようなお話でした。私は講演の一ヶ月前で窮地に立っていたため、あまりに凶々しいこととは知りながら、敢えてご親切なお申し出に甘んじさせていただくことにしました。そしてその一週間後には、この貴重な写真等のレイアウトも整った原稿が添付ファイルとして手元に届きました。ブリュールマイヤー博士の名状しがたい寛大さとご親切に本当に感激いたしました。

以上申し上げましたようにして、何人ものご親切な方々の協力を得て入手した資料や情報を基に、ペスタロッチ・ライフマスクの由来と現代的意味についてお話ししたいと思います。

ペスタロッチを題材とする絵画や胸像などの美術作品は、数多く残されています。彼が歴史

的に重要な人物であると評価されたのは、第一義的には、下層民衆の人的、経済的、社会的解放を願い、そのために不可欠な民衆教育の創出と具体的実現を目指した教育思想家、実践家としての功績にあったからであります。ペスタロッチは青年期の頃から、極貧状態の家庭に生まれた子どもであれ、恵まれた豊かな生活をしている当時の支配階層や市民階層の子どもであれ、だれもがさまざまな能力や才能の芽を神から与えられている、本質においては全く平等な人間存在なのだ、と考えておりました。そうした能力や才能の芽を適切に発達させるための教育が下層民衆の子どもたちには決定的に欠けていることこそ、人間社会の不平等を生み、その解決を妨げている根本原因だ、と彼は考えました。そこでしかるべき民衆教育を創出することを通して、子どもたちの知的、道徳的、身体的諸能力を発達させ、民衆の子どもたちの人的、経済的、社会的開放と自立を実現させようとしたのでした。

ノイホーフでの農場経営が破綻した1774年に、彼自身が貧困状態に陥りながらも、貧民教育舎を開き、新しいかたちの民衆教育に取りかかります。ペスタロッチがめざしたのは、農業社会から産業化社会へと急激に移りゆく歴史的状况を踏まえ、一方で産業労働に必要な実践的知識と技能、自らの土地から食料を得るのに必要な農業上の知識と技能、そして家政（商業）に関する知識と技能、という三領域における知識と技能を養うと共に、スリーアールズと宗教・道徳教育との基礎能力を養う総合的人間教育を行うことでした。

こうした彼の民衆教育思想は、バーゼルの汎愛主義者イーゼリンの『エフェメリデン』誌に数回掲載されたいわゆる『ノイホーフ便り』を通して世に問われました。さらに異色の農民小説『リーンハルトとゲルトルート』により、ますます広く知られるようになります。1792年にはフランス革命政府からフランス名誉市民の称号も与えられます。やがて1798年にはフランス革命の影響を受けてスイス革命が起こり、旧スイス同盟は崩壊してヘルヴェチア共和国が生ま

れます。ペスタロッチは革命政府の広報誌『ヘルヴェチア国民新聞』の編集長となり、政府に協力しつつ、自らが主唱する民衆教育思想を共和国で実現させようと政府に働きかけます。

ところがほどなくスイス同盟発祥の地である中央スイスで反革命運動が起こり、これを鎮圧しようとするフランス軍によってシュタンス(Stans)の町で多くの死者や家屋消失等をもたらす大惨事が生じます。ここに孤児や物乞いの子どもたちの救援のために孤児院が設立されますが、その院長として52歳のペスタロッチは孤軍奮闘するわけですね。ここで画期的な教育実践が行われ、それがやっと軌道に乗るかと思われた矢先に、政府の都合でペスタロッチは孤児院を去らざるを得なくなります。

激務の中で瀕死状態に陥っていたペスタロッチはなんとか健康を回復し、ブルクドルフの町の学校の教師になります。いつ追放されるかもしれないという不安を抱えながら、こつこつと彼独自の教育実践を展開し、成果を上げていきます。そしてヘルヴェチア共和国の公設教員養成所の責任者となり、1800年には論文「メトード」が、1801年には『ゲルトルート児童教育法』が刊行されます。こうしていよいよペスタロッチの教育者としての名声はヨーロッパ中に知れ渡ることになります。すでに1803年か1804年の頃、ペスタロッチを称えるメダルが作製されておりました。ブリュールマイアー博士によれば、このメダルは紫色がかった背景の中に雪花石膏製の白色レリーフがのっているもので、すばらしい芸術作品であったようであります。

このメダルを制作したのはクリステン (Joseph Maria Christen 1767-1838) というスイスの芸術家でした。クリстенは中央スイスのヴォルフエンシーセン生まれで、ローマのトリベル (Alexander Trippel) という彫刻家のもとで学んだ後、シュタンス、ルーツェルン、バーゼル、アールラウ、ベルンで活動します。彼は1796年に、ペスタロッチが有力会員の一人として活動していたヘルヴェチア協会に入会しています。クリстенは生涯に166体の彫刻を制作し、そのうちの96体は現存が確認されているということ

あります。

クリステンが生まれたのは住民のすべてがカトリック教徒であるといった、政治的には非常に保守的な土地でありました。住民はこぞって真っ向から革命に反対しておりましたが、クリステンはただ一人、スイス革命に賛同する立場に立ちました。彼は改革派教会に属する女性と結婚しますが、正当な結婚であると認められず、彼の5人の子どもたちは市民権も国籍もないまま生きなければならなかったようです。そんな政治的、宗教的、思想的立場にあったクリステンだからこそ、ペスタロッチの生き方や活動に共鳴し、ペスタロッチに対して敬意をいっていたので、いち早く、ペスタロッチの記念メダルを作って彼の思想や実践を世に広めようとしたのだと思われます。

他方、ペスタロッチの肖像画についてみると、1805年に、ペスタロッチと彼の唯一の孫であるゴットリーブを描いた、ペスタロッチの伝記本などにしばしば掲載されている、あの有名な油絵が描かれています。これを描いたのはシェーナー (F. G. A. Schoener 1774-1841) という画家です。ドイツのフランケン地方出身のシェーナーは、1803年から1810年頃までスイスで活動しました。彼はペスタロッチに親近感をいだき、1803年から1804年のイースターの頃までブルクドルフに滞在し、さらに1805年からはイヴェルドンに滞在して、ペスタロッチの肖像画などを残しています。

1808年に描いた油絵は、外套をまとい、白いネックチーフを首に巻いて、右手を懐に入れて直立しているペスタロッチの肖像画です。その原画はチューリッヒ中央図書館に所蔵されていますが、かなり写実的な絵で、おそらくは当時のペスタロッチ本人の姿をかなり忠実に表現しているのではないかと思います。ところがシェーナーは、いわばこの絵の改作とも思われるような作品を1811年に描いているのです。この油絵では、ペスタロッチは少し左に首を傾げていて、1808年の作品と比べると、全体として繊細なタッチで、かなり滑らかに、表情も穏やか



ヘルリベルク実科中学校の教室に1930年代(?)から1977年まで掛けられていた額(福田所蔵)

で親しみやすく描かれています。ある意味で1808年の絵よりもはるかに芸術的な作品になっているのです。この油絵はペスタロッチ研究所に所蔵されています。

ちなみに私はペスタロッチ没後150年に当たる1977年4月から翌78年4月までチューリッヒ大学交換研究員としてチューリッヒに滞在しました。その折に、チューリッヒ近郊のヘルリベルクにある実科中学校のベテラン教師ブルン氏から、この絵の複製品の額を贈呈されました。その学校を訪問させていただいた際に、記念にプレゼントしてくださったのです。1977年の時点で、30年ほど前からこの学校の教室に掛けられていたものだ、と言っておられましたので、おそらくはペスタロッチ没後100年に当たる1927年頃に制作・販売されたものではないかと想像されます。

こうした肖像画等を普及させることにより、スイスの教師や教育者たちにスイスの生んだ大教育思想家・実践家ペスタロッチの教育精神に学ぶべきことを訴えたのではないかと、私は思っています。

以上、ペスタロッチの記念メダルと2枚のシェーナーの油絵についてお話しいたしましたが、実はペスタロッチのライフマスクが制作された

のは、シェーナーによる肖像画が描かれた頃だったのです。そのいきさつについて、ブリュールマイアー博士のご研究の成果を参照しながら、簡単にお話し申し上げたいと思います。

先ほどもお話ししましたように、ブルクドルフ時代からすでにペスタロッチの教育思想や実践はドイツをはじめ、フランス、オーストリアなど、ヨーロッパ中に広く知られていました。1806年、ナポレオン・ボナパルトのフランス第一帝政によってライン同盟が結成され、翌年、神聖ローマ帝国は解体します。この過程でバイエルン選帝侯領はバイエルン王国になりますが、その初代バイエルン国王となったマキシミアンは、早くからペスタロッチに深い関心をいだいておりました。

そんな関係もあってか、彼の息子で、1825年に第2代バイエルン国王ルードヴィッヒ I 世となる皇太子ルードヴィッヒは、1805年にペスタロッチのイヴェルドン学園を訪問しているのです。この皇太子ルードヴィッヒ I 世は、全ドイツ民族にドイツの偉人たちと歴史的共有財産を想起させたいという思いから、1807年に、「賞賛に値する著名なドイツ人の殿堂」として、いわばドイツ版ヴァルハラ神殿 (Walhalla) を建設する構想をたてました。北欧神話の戦士の魂の館といわれるヴァルハラ神殿をモデルとしていますが、この神殿には戦士だけでなく、科学者・著作家・聖職者も含めた偉人たちを、男女の別なく祭ろうとしています。この神殿建設計画の背後には、当時のドイツのナショナリズムの高揚がみられるわけですね。

いずれにしても皇太子ルードヴィッヒは、称賛に値する著名なドイツ人たちの殿堂に胸像を取められるべき人物を自ら選び出し、その人たちの同一規格の胸像を何人かの彫刻家に作製させて納める、という計画を立てたのです。その対象者を選ぶに当たり、彼は1808年にスイスの歴史家ヨハネス・フォン・ミュラーと相談しています。対象者の選定基準は「ドイツ語を話す人物であること」とされ、スイス人も対象とされることとなります。結果的には、スイスを代

表する人物として、ハンス・フォン・ハルヴィル、アロワ・フォン・レディング、そしてペスタロッチの3人が選ばれました。

皇太子ルードヴィッヒは1808年に早速自らバーゼルに赴き、クリステンに3人のスイス人の胸像制作を依頼しました。クリстенは即座に仕事に着手し、12月にはイヴェルドンのペスタロッチ学園をも訪ねます。ここで当時63才であったペスタロッチの顔面から石膏で型を取り、次いで粘土でマスクを作製し、乾燥させた上で焼く、という手順でテラコッタのライフマスクを作製しました。これがオリジナルのライフマスクということになります。そしてこれを基にして、ペスタロッチの石膏胸像をおそらく2体、制作したとされています。1体はヴァルハラ神殿納付用の大理石胸像の原型として用いられ、他の1体はペスタロッチに贈呈されたと考えられます。

ペスタロッチは1809年5月16日のクリステン宛に、「ポートレートと胸像とを受領した」と感謝の手紙を書いているのです。この「ポートレート」について、ブリュールマイアー博士は、オリジナルのライフマスクを指す可能性は極めて低く、おそらくは先に触れた雪花石膏製のメダルを指すのだろうと推測なさっています。

いずれにしても、ペスタロッチが自分の胸像がヴァルハラ神殿に取められることを喜んでいることをクリстенから伝え聞いた皇太子ルードヴィッヒは、1809年2月18日付けの手紙で、ペスタロッチに次のように書いています。

「教授殿、私が貴殿に対して抱いている敬意の証となる取り計らいをお気に召したとのことを知り、うれしく思っています。故意に真理に逆らおうとしない者であれば誰であれ、貴殿と面識を得るとき、このような敬意を抱かずにはおられませんまい。私は学校に対する配慮は、統治者にとって最も重要で最も大きな義務であると確信しております。…」と。

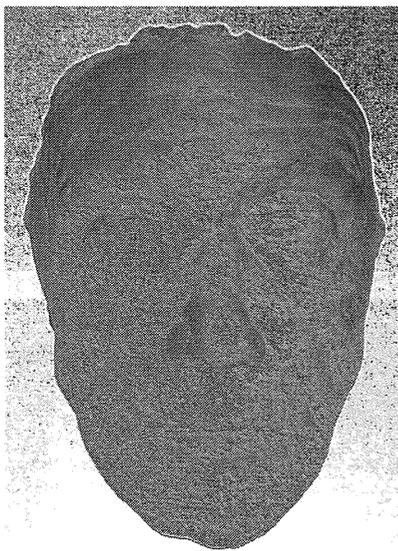
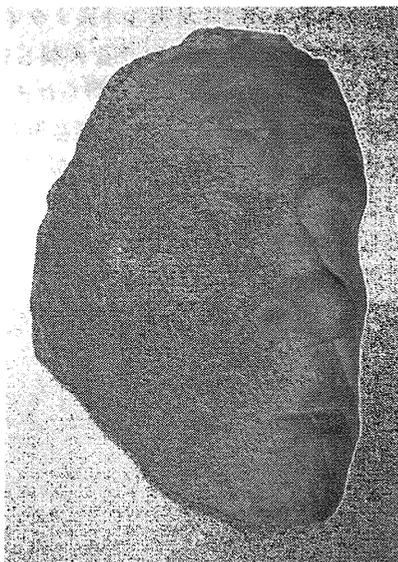
この手紙からも窺えるように、若い頃のルードヴィッヒはかなり革新的でありました。芸術を奨励したり、ルードヴィッヒ・マクシミリアン大学をランツフトからミュンヘンに移転し

て工業化を促進したり、ドイツ初の鉄道を敷設するなど、1830年のフランス7月革命以前は自由主義的な政策をとりますが、革命後は反動に転じ、1848年革命の直中で、スキャンダル事件で王位を追われます。かなり問題ありの人物であったわけですが、少なくともペスタロッチのライフマスクとの関連で言えば、その作製に際して決定的に重要な役割を果たしたのは事実であります。

なお、ヴァルハラ神殿に収められることになっていた大理石のペスタロッチ胸像をめぐるのは、大変ドラマティックな歴史があったようであります。ブリュールマイヤー博士は綿密かつ徹底的な探究をされていますが、ここでは概略だけをご紹介します。クリステンは精力的に仕事を進め、自分で選んだ素材の大理石を用いてペスタロッチたちの胸像を仕上げますが、気まぐれで短気な皇太子ルードヴィヒとの間に行き違いがあったようで、それらの納品を拒否されてしまいます。怒ったクリステンはその胸像をたたきつけて、部分的に壊してしまったらしいのです。胸像のその後の興味深い歴史的経緯については、ここでは省かせていただきます。

1809年に出来上がったオリジナルのペスタロッチ・ライフマスクの話に戻りますが、そもそもそれがペスタロッチに贈られたのかどうか、贈られたとしたらそれはいつであったか、については不明のようであります。ただ、そのマスクのその後について、イヴェルドン時代にペスタロッチが最も信頼していた協力者であったフランクフルト出身のミーク（J. E. Mieg 1770-1842）が1810年に学園を去る際に、ペスタロッチがこのマスクをプレゼントした、とされてきております。

いずれにしても、ペスタロッチ・ライフマスクはドイツに渡ります。ミークの生存中は彼のもとで保存され、その没後（1842年以降）のいずれかの時点でミュンヘンの骨董商ヨルダンの手に渡ります。そして1901年に、スイスのゴットフリート・ケラー財団によって、当時の3,200

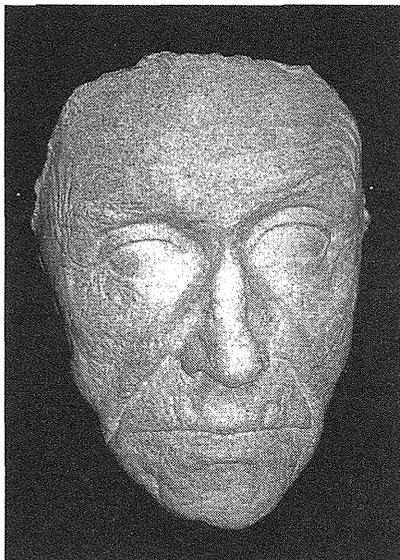
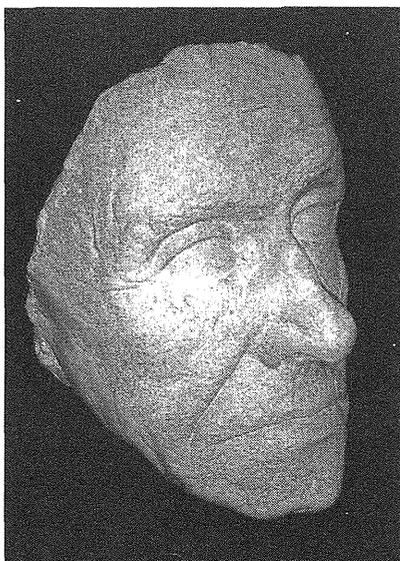


オリジナル・ライフマスク Joseph Maria Christen 制作 1809年 ペスタロッチ研究所所蔵

フランという大変な高額なものだったようですが、ヨルダンからこのマスクは購入されます。そしてペスタロッチ研究所に供託物として貸与され、そこで今日まで長年にわたって保存・展示されることになったわけですね。

ところで1927年、ペスタロッチ没後100年の記念の年に、ペスタロッチ研究所はゴットフリ

ート財団の許可を得て、オリジナル・ライフマスクから50個限定で複製マスクを作製します。それには一つひとつナンバーが着けられました。先にお話ししたクーレマン教授が現在所有しておられるマスクは、Nr.2という表示板が着けられている貴重なマスクの一つなのです。このようにして造られたいわゆる第一世代の複製マ



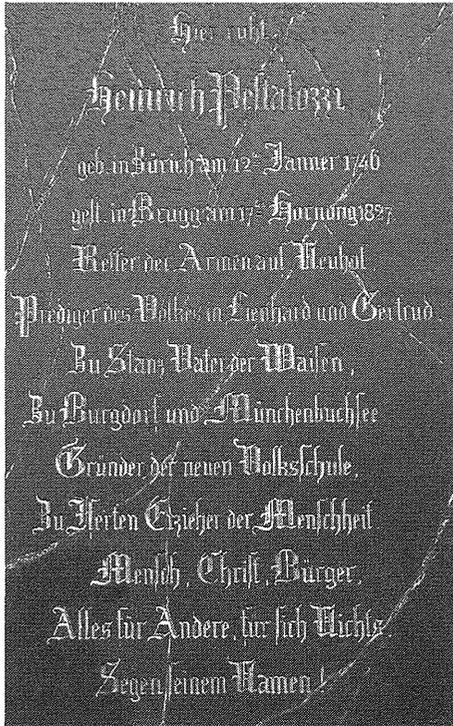
現在ペスタロッチ研究所が所蔵する2個の複製マスク（上：明るい茶色，下：ややくすんだ白色）

スク50個は、当時の「功績あるペスタロッチ研究者」に贈呈されたのでした。

先にもお名前を挙げましたチューリッヒ教育大学講師のレベッカ・ホーラッハー博士のお話しによると、その後1960年代に何回か重ねて複製マスクが作製されたようですが、いつ、何個複製されたかは不明だということでもあります。その後はゴットフリート・ケラー財団によって複製マスクの制作は固く禁じられ、今日に至っているということです。この度御寄贈いただいたマスクは、小西美良先生宛の献呈状によれば、1967年当時にペスタロッチ研究所に唯一残されていた、貴重な最後の複製マスクであったこととなります。そういうかたちで日本にはるばる送られてきて、しかも、非常によく保存されてきた貴重なマスクが筑波大学に寄贈されたことは本当にありがたいことだと存じます。

このペスタロッチのライフマスクの持つ意義について、もう一つの観点から触れておきたいと思います。ペスタロッチが亡くなったとき、彼の遺骸はノイホーフ近郊のビル村の教会堂と小学校との間のささやかな土地に埋葬されました。その後ペスタロッチ生誕100年に当たる1846年に学校が改築されるに際して、埋葬地からわずか数歩程離れた土地に面する新校舎の壁面全体が墓碑に充てられることとなります。その墓碑銘はアウグスティン・ケラーによって書かれました。

ところで、1984年にペスタロッチの墓所付近の庭の手入れが行われたときに、偶然、埋蔵されたままのペスタロッチの遺骨の一部が発見されました。彼の四肢がほぼ完全な形で残されていたということでもあります。こうして発見された遺骸をもとに最新の科学技術を適用した人類学的、病医学的な研究の結果、さまざまな発見がなされます。たとえば、このライフマスクは忠実に63才当時のペスタロッチの姿を現していること、ペスタロッチの若い頃の身長はほぼ170センチメートルであり、亡くなった頃には165センチメートルほどであったこと、右手の親指の骨の状態が、驚くべき大量の文書や手紙を生



Augustin Keller によるペスタロッチ墓碑銘  
(1846年)

涯書き続けたことの結果を示していること、等々実が明らかにされたのです。この事実に照らしてみると、改めてこのライフマスクの持つ意義がいかに高いかがわかりますね。もちろん、芸術的な優れた肖像画などの意義が薄れるなどということにはならないのはいうまでもありませんが。

最後にこのマスクに対して私が抱いている思いや期待を簡単に述べさせていただきます。例えば、今回のペスタロッチ祭の表紙にも有名なグループ作「シュタンスのペスタロッチ」(1879年作)が掲載されています。大変有名な絵ですが、中野光先生の『日本のペスタロッチーたち』によりますと、この絵は大正期、そして昭和初期の教育運動において大きな役割を果たしたということでもあります。そして戦後も、昭和26年の文部省『学習指導要領社会科編(試案)』の表紙に掲載され、平和的な国家及び社会の形成者たる国民育成を目的とする新教育を担う教

育者たちを大いに勇気づけたのでありました。(残念ながら、この5年後には掲載されなくなりました。)このように、大教育家ペスタロッチを題材とする絵画や彫像等は、さまざまな国における教育改革運動を支援し、真の民主的な教育の促進に大きな働きをしてきました。

ペスタロッチの生前の容貌を彷彿とさせるこのライフマスクも、内に秘めた抜群の現実性の威力によって、子どもたちの健全な成長・発達を願い、その子どもたちが生涯、平和で民主的で、だれもが人として尊重され、平等に共存できる社会で生活できることを切望しつつ教育活動に専念するすべての教育者に大きなインパクトを与えてくれるであろうと、私は確信しております。いじめ、体罰、虐待等々、子どもの人権をめぐる問題が後を絶たず、また、主権在民、基本的人権の保障、恒久平和の追求を3本柱とする日本国憲法を理不尽にも改正しようとする勢力が教育をも不当に支配しようとする危機的状況が、現在の日本社会に迫っております。だからこそ、以前にも増して、私は教育や教育学の世界におけるペスタロッチ精神のリバイバルを切に願っているのです。このマスクが、民主主義社会を根本から支える教育の復活と発展のために大きな働きをしてくれることを期待してやみません。

ご静聴ありがとうございました。

(本稿は第35回ペスタロッチ祭において行った特別講演録を加筆修正して完成させました。本文中で触れたブリュールマイヤー博士からご提供いただいた資料名等は以下の通りです。2013年11月13日現在、出版はされておられません。Arthur Bruehlmeier: Gesucht und entdeckt: Die Walhalla-Bueste Heinrich Pestalozzis.)